

発行日：1996年9月15日

ろくおん通信

No. 85

発行：盲人福祉センター録音製作係

処理を考える (13)

処理の考え方



『ろくおん通信』の紙面でさまざまな文章の処理の例を載せていますが、ときどき無駄なこと(?)をしているような気になることがあります。いろいろな例文を取りあげること、参考にしてもらおうと思っているのですが、実は、音声訳者自身が「何のために処理をしているのか」ということをはっきりおさえていないと、いろいろあげていることがかえって混乱をおこしているケースもあるようです。例文と似たような文章が出てきたら機械的に当てはめたり、マニュアルにある処理の例にあがっていればどれを使って処理をしてもよいと思われている方があったりするなど、処理についての考え方がはっきりしていないことで、かえって混乱している方もみられます。

その意味で、再度「処理とはどういうことか」ということについて考えてみます。

最近、「処理」を「配慮」という言い方をする人もあるようですが、要は、「処理」とは「晴眼者の為に書かれた墨字資料を、視覚障害者に、その原本の内容を聞き易く、できるかぎり正確に、ある時は使いやすいように工夫しながら音声化していくこと」です。その点では「音声訳」の作業そのものといえるものであり、音声訳の「中心」になるものといえるでしょう。

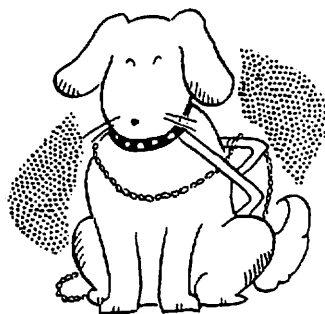
音声訳者は、原本を音声化する前から、利用者層や原本の内容などに目を通しながら、どのように作るか、使い勝手なども考えて作り方を決めていきます。さらに、本文に入ったら、項目の大・中・小の配慮、引用文や注の扱い（よりわかりやすい処理）、図・表の扱い、漢字の処理、会話文、記号などなど、「処理」の作業は「音声訳」の作業そのものです。

ところで、音声訳の仕事で音訳者が悩むことの問題が、「書いている通りに読む」ということと、「聞き手にわかるように読む」ということでの混乱です。一見、この事は矛盾するもののように思われるからです。これまで、音声訳は「原本に忠実に」「音声訳者は墨字に書いてある通り読み、足したり引いたりしない」といったことがやかましく言われてきました。このことで、「原本に忠実に読むこと」つまり、「正確に読むために、校正の必要性が認識されるようになり、今では、どこの点字図書館でも校正が当たり前になってきました。（盲人情報文化センターも、昔は校正はしていませんでした。）その点では、より正確な資料をつくるという面では前進してきました。しかし、「より正確に読む」ということだけでは「より正確に伝える」ということにはならないことが多々でてくる中で、「より正確に伝える為のさまざまな工夫（配慮）」が必要になってきたわけです。今、私たちが、「処理」として取りあげているのはこのような場合です。例えば、墨字の原稿を電話で読んで伝えるとしたら、そのまま読んだのでは相手がわからない箇所が出てきて質問をうけ補足をしなくてはならないことがある筈です。その作業が、より正確に伝えるための作業、つまり「処理」の考え方です。正確に読んだつもりでも相手に正しく伝わらなかつたら、「音声化」（？）は出来たとしても「音声訳」をしたことにはなりません。つまり、原本の内容が正しく伝わって初めて「音声訳」したことになるわけです。しかし、「正確に伝える」ということと、「難しい内容をわかるように言葉の意味を説明しながら読む」という事とは違います。「お節介」をすることでは決してありません。

前にもあげましたが、例えば「・・・」という記号を、或時には「3点リーダー」、ある時は「てんてんてん」、ある時は「前略」「中略」「後略」、ある時は「間であったり」、「無視したり」、「何々と言ひ換えたり」と、さまざまに読むことがあるのも、墨字の場合、同じ記号がいろいろな意味に使うことができるのに、音声の場合では単に記号を読んだだけでは、墨字の世界で使われているようには聞き手に伝わらないからです。

聞き手にできる限り正しく伝える方法は、「マニュアルがあればできる」といったものではなく、読んでいる原本の中に答えがあるわけで、音声訳者自身が利用者の立場にたって考えながら処理するべきものです。

「処理上手？」になるには、できるだけ他人のテープを聞くことです。また、原本から離れて録音図書を聞くと、いかに録音図書が分かり難いかということを発見できるでしょう。適切な補足は音声訳者のセンスが求められるものですが、校正の仕事は音声訳者にとってもよい勉強になると思います。その意味でも、音声訳者が積極的に校正の仕事にタッチしていかれることをお勧めします。



（「音声訳」を考える 37）

* 今回は、音声訳者のTさんたち（複数）に処理の例を考えていただきました。
<>内は補足の部分です。

【例文1】

「コーヒー」と「珈琲」<先のコーヒーはカタカナ、後は漢字二文字>

英国の随筆などを古い翻訳で読んでみると、「牛津」に旅行したというようなことが出てきて面食らうことがある。「牛久」なら聞いたことがあるし、うっかり忘れていたらしい講義を急遽代わってさしあげた縁で、当時筑波大学の某有名教授からその葡萄酒をもらったことがあるが、こからイギリスに出店を出したという話は聞かない。第一、外国の地名が漢字で出てくること自体が尋常ではない。イギリス<漢字三文字で、英雄の英、大吉の吉、利益の利>、フランス<漢字三文字で、仏、花の欄、西>、ドイツ<漢字二文字で独立の独、秀逸の逸>、イタリア<漢字三文字で、伊勢の伊、フトイ、利益のリ>、スペイン<漢字三文字で、西、マダラ、キバ>、ポルトガル<漢字三文字、葡萄とキバ>、オランダ<漢字二文字で、平和の和、花の蘭>あるいは、ギリシャ<漢字二文字で、希望の希、陰暦12月の意味の臘月の臘>、ローマ<漢字二文字で羅針盤のラ、ウマ>といった国名は有名だから見れば見当がつくが、初めて見て見当をつけるのは至難の業だ。地名でも<漢字二文字で、倫理の倫、敦煌の敦>や<漢字二文字で、トモエ、里>ぐらいならいいが、都市自体は有名でも「紐育」<漢字二文字で、紐、教育の育>や「桑^{サンフランシスコ}港」<漢字二文字で、植物の桑、ミナト>あたりになれば、あらかじめ知っていないと、まず読めないだろう。ほとんど判じ物みたいなものだ。

<漢字三文字で、阿蘇のソ、人格のカク、花のラン>や<漢字二文字で、伯爵のハクとハヤシ>などは答えがわかっても、どうして「スコットランド」や「ベルリン」となるのか、すっかりとしない。その点、英語の「オックス」を「牛」と訳し、「フォード」を<大津の津>と訳したこの映画の都「牛津」は、映画の都「聖林」^{ハリウッド}<漢字二文字で、聖書のセイとハヤシ>と同様、わかってしまえば、なるほどと思う。

意味を漢字に置き換えるのではなく、音を漢字で写し取った一般の当て字は、本来は関係のなかったはずの漢字の意味が新たなイメージを作り出し、それが語感として働く場合がある。アメリカを中国語では<漢字二文字で、美しいと国>と書くらしいが、そうすることで、その国が風光明媚な土地であるような印象が生まれるのではなからうか。日本語でも<漢字二文字で、コメと国>と書くので、米の収穫が豊富な国という感じをもつ人多そうだ。「ベイコク」という音も<漢字二文字でコメとコクモツのコク>を連想させるかもしれない。<漢字三文字で英雄の英、大吉の吉、利益の利、イギリス>、という字面も、漢字の力で、秀でる、めでたい、もうける、といった国柄のイメージをよびおこすことはないだろうか。・・・

【例文2】

十字架のつなぎ目

まり恵の二人の子どもは、頭脳と身体の分裂という現代人の苦悩を背負って死んでいった。マ

リアの子キリストも人類の苦しみを賜うために死んだと言われているが、キリストは現代人に対して癒しを与えないのだろうか。ともかく、まり恵にとっては直接的には助けにならなかった。それについて私の勝手なイマジネーションを述べさせていただくと、キリストの背負っていた十字架は<十字架のマーク>という形が示すように横棒が少し上にあり、身体に対して精神の優位を示している。これに対して、ムーサンと道夫という人間の十字は、王のように身体も精神も同等に見る正十字のように思えるのである。<音声訳者注、正十字の十は同じ長さの二本の棒が直角に交わりお互いを二等分しています。それに対して十字架のマークは横棒が縦棒より短く真中より上の方にあります。注おわり。>

人間と他の動物との差について考えると、確かに人間の精神の存在は、それと他とを区別する大切なメルクマールであるし、そのような意味での精神性の強調は、約二千年間くらい必要だったのであろう。しかし、二十世紀も終わりに近づいてきたあたりで、人間はもう一度、人間と動物との差があまりないことを自覚し、それを十字架として背負ってゆくことを必要とするようになったと思われる。そして、そのような意味での身体と精神とのつなぎ目に存在している「性」<性教育のセイ>ということが、実に重い意味をもつようになってきた。『人生の親戚』のなかで、性が重要なトピックとして語られるのも、このためであろう。

しかし、性というのは実に厄介なものである。体験せずに考えることはできないし、体験にのめり込むと考えることができなくなる。「精神」の優位を説こうとする宗教が、性をタブー視したこともよく了解できる。また、宗教----と言ってもキリスト教----に対して強い攻撃を加えようとしたフロイトが、性のことを正面からとりあげたのも当然である。しかし、それも「性」に関する「教義」によって固められた擬似宗教的な様相をもちかねない。

まり恵はアンクル・サムというアメリカ人のボーイフレンドをもつ。サムはまり恵を性的に満足させれば「それだけで生きてゆかせることができる、と信じこんでいる様子なの。私には魂の問題もある、とは思わないんだわ」と、まり恵は言う。そしてサムは彼女が「チューター・小父さん」と呼ばれる人物を中心にする小さい宗教的集団の「集会所」へ入ったのも、その集団に「なにかオカルト的な性の秘法でも使われているのかと、邪推」したりする。性は魂に到る重要な通路となり得ても、性の満足イコール魂の癒しとはならないのである。

まり恵はチューター・小父さんの指導する「集会所」に入り、アメリカにまで行くが、そこで小父さんが病気で死んでしまう。グループの娘たちは、小父さんに続いて天国に行こうと集団自殺をしようとするが、まり恵が皆を説得して思いとどまらせる。このことも重要だが省略して、性に関する話を続けよう。

まり恵が苦心して「集会所」の娘たちを日本に帰したとき、日系メキシコ人、セルジオ・松野が、自分の経営する農場の精神的中心としてまり恵に来てもらうということを考える。松野の農場にはインディオや混血^{メスチン}の人、日系人などいろいろな人がいるが、まり恵のような不幸な経歴をもった人が、その人たちのために献身してはたらくのを見ると、彼女を「聖女のように崇め」ることによって、そこに中心を見だし、団結して仕事をするだろう、というのが松野の考えであった。まり恵は考えた末、それに乗るのだが、そのようなことを自分本位を示している。

二通りの読みがあって意味が異なるもの（４５）

公用	コヨ	公共の用務	下野	ゲヤ	官職を辞して民間に下ること。
	クヨ	賦課された銭		シモツカ	旧国名（下毛野の略）
国名	クメイ	国の名	曲る	マがる	真っ直ぐでなくなる
	クニナ	平安時代の女官の呼び名		キョク	ひやかす。なぶる。
下地	シタジ	土台、素地、素質	大曲	タイキョク	規模の大きい曲
	ゲジ	低い地位		オウカゲ	寒く感ずる声。

きれいに録音する為に 23回

訂正すると前の音と合わない

録音図書を製作する上で、校正は欠かせない作業です。校正をするとどうしても訂正の作業が出てきます。訂正のやり方がまずいと、間がなくなったり、音質が変わったり、操作音が入ったりして訂正をした箇所がはっきりわかります。上手な人が訂正をするとどこを直したのかわからないものもあります。

上手に訂正するには、①同じ場所で、②同じマイク・同じ録音機で、③マイクの距離や角度を変えず、④間違いを含む文章を全体（誤読の語句だけを訂正する人がいます）を、⑤後追い録音で行わなくてはなりません。特に、①②③が変わると音質に影響しますので、いくら録音レベルを合わせても、音質が変わって前の音と合わないといった事が起こります。小説などで、訂正した為に、調子や間まで変わってしまうと、利用者は場面が変わったのかと思い違いすることも起こります。

訂正を完璧に行うことは不可能ですが、ほとんど気にならないくらいに訂正ができるようになることが大切です。

リクエスト図書一覧

利用者から製作依頼を受けている原本

『算命学中国占星術』 <心理学>	『蒼穹の昴』 上・下 <小説>
『可視光線総合療法』 <医学>	『顔に降りかかる雨』 <小説>
『ヨセフとその兄弟 Ⅰ』 <小説>	『愛される弟子』 <宗教>
『ヨセフとその兄弟 Ⅱ』 <小説>	『無から有を生み出す神』 <宗教>
『ヨセフとその兄弟 Ⅲ』 <小説>	『愛、無限』 <宗教>
『母と子の初めての音楽体験』	『幸福瞑想法』 <宗教>
『幼児のピアノはスタートが勝負』 <音楽>	

※お願い 以上のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。
引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。

今回引き受けて頂いた原本とグループ

『株取虫』 <情報科学>	テープライブラリーにしのみや
『シーラーという子 虐待されたある少女の物語』	〃
『狂信者』 (上・下) <小説>	えくてもあ

＝ お知らせ ＝

発声、アクセント等の勉強会

日時：10月24日(木)
15時～16時30分
会場：盲人情報文化センター6F
講師：橋本勝利(日本ライトハウス理事)
内容：今回は、盲人情報文化センターの音声訳ボランティアと対面リーディングボランティアの方を対象にした勉強会です。初心者を対象に発声の基礎から勉強します。グループの方で、この勉強会に参加を希望される場合は録音製作係までご相談ください。

近点協ボランティアの集い

日時：11月8日(金)
内容：午前 講演会(講師は未定)
午後 分科会 13:～15
上手な家庭録音の仕方
講師：近点協録音製作委員会のメンバー
近点協の録音製作委員会が担当で、録音音技術の講習会を行います。グループの方で初心者の方にはお役にたつと思います。